

「知事とのフレッシュトーク」（平成27年12月10日実施）の概要について

「知事とのフレッシュトーク」は、知事が高校生の皆さんと県の未来について意見交換を行うものです。

平成27年12月10日（木）に青森市の県立青森西高等学校において実施した、「知事とのフレッシュトーク」の概要をお知らせします。

◆開催◆

【意見交換】

○ 発言者1（1年、女子）

私は、アーチェリー部に所属しています。もともとアーチェリーに興味があったわけではありませんでした。でも、先輩たちの熱心な勧誘でアーチェリーを始めました。今は、新しいスポーツに挑戦したという自分の高校生活にとっても充実感があります。入部後、青森県には、古川高晴選手というオリンピック銀メダリストがいることを知り、驚きました。高校に入学後に初めて見たスポーツは、実はアーチェリーだけではありません。ボートやフェンシングです。



このように、小学生や中学生が経験することがないスポーツを体験させ、適性を見極めることで、青森県からオリンピック選手が誕生したり、青森県ならではのスポーツが発展すると思います。また、かつては相撲やカーリングを青森県全体で応援する雰囲気がありました。最近に関心が薄くなっているように感じます。

青森県の資源・財産である「人」や「環境」を活用し、「青森県のスポーツはこれだ！」というものをつくりたいです。

○ 知事

大事なことを言ってくれました。

カーリングが日本の人たちに知られるようになったのは、やはり「チーム青森」の貢献が大きかったと思います。カーリング日本女子代表チームとして、オリンピックで頑張ってくれました。

フェンシングは、今別町が盛んで、今別町長は国体級の選手でした。そういったこともあり、2020年の東京五輪・パラリンピックに向け、モンゴルのフェンシングチームの事前合宿が今別町で行われることになりました。

いろいろなスポーツがあるということを知らしめる努力の大切さ、その中からオリンピック級の選手を育てた方がいいという意見ですね。

○ 教育庁スポーツ健康課職員

私は、ジュニア選手を発掘・育成する事業を行っています。

小学校4年生から6年生まで、ゴールデンエイジと呼ばれる運動の神経系が発達する時期の子どもたちを対象に、テストを行っています。

今年の4年生を例に説明しますが、県内に小学校4年生が1万1千人、その中から新体力テストを行って選考された人が、全体の約11%の1,200人。更に、その子たちに別の運動能力テストを行って、30名選考しました。

その子たちは、いろいろなスポーツをしているのですが、その子の持っている可能性からすると、もしかすると、そのスポーツでない方が世界で活躍できるかもしれないというようなことも検証して進めていきます。

具体的には、年2回の育成キャンプを実施し、スポーツ科学を活用した各種トレーニングや栄養指導、心理サポート、専門競技以外の競技体験等の育成プログラムを通して、自分に適した種目を見出し、今後のスポーツ活動のきっかけにしてもらいます。

○ 知事

子どもたちの最も適した方向性を見極めてあげるということを、今始めていました。

また、本県にゆかりのある、いろいろなジャンルの国際級のスポーツ選手たちが集まって、次の世代に働きかけていこうと、「あおもりアスリートネットワーク」という会を作ってくれています。

○ 発言者2（2年、女子）

平成23年にスポーツ基本法が改正され、スポーツによって得られる心身の成長は、全ての人々が与えられるものだということが特に強調されているものと感じています。

障害を持った方が、自主的にかつ積極的にスポーツを行うことができるよう障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければなりません。

私はバスケットボール部に所属しています。昨年、マエダアリーナで行われた車椅子バスケットボールの大会補助員として参加しました。車椅子がぶつかり合う音や、選手たちの迫力あるプレーを見ることができ感動しましたし、貴重な経験でした。車椅子バスケットボールの素晴らしい点は、障害を持った人もそうでない人も、同じチームで試合に出られることです。

しかし、活動の場所がありません。車椅子で転倒するとフロアに傷がつきます。また、車椅子で移動ができるよう、バリアフリーが進んでいなければ、障害を持った方の自主的な活動はできないと思います。

車椅子バスケットボールに限らず、他の競技で障害者スポーツに取り組んでいる団体はありますか。



○ 知事

すごく大事なことだと思います。

ノーマライゼーションという言葉聞いたことがあると思いますが、誰もが、この地球上で一緒によりよく生きることを考えていく、そういったよい時代だと、私は思っています。

その中で、障害のある方々もスポーツの全国大会や世界大会などに参加するということは大事だと思っています。全国大会や世界大会前には、よく県庁にあいさつに来てくれます。たくさんの方々が自分の人生をスポーツの中で輝かせる、そういう時代になってきたと思います。

青森県では健常者の団体が、障害者の方々と一緒にやっぴこうという機運が、今高まっています。

青森県でも、どのように取り組んでいるかを含めて、担当から話をさせます。

○ 健康福祉部障害福祉課職員

障害者スポーツは、アスリートのスポーツと社会参加のスポーツと大きく2つありますが、私からは、社会参加のスポーツを推進する取組等について話をします。

- ・ 「青森県障害者スポーツ大会」を毎年8月末から9月中旬にかけて、青森県総合運動公園を中心に行っています。

青森西高の吹奏楽部の皆さんには、開会式の演奏や昼のミニコンサート等で、非常によく協力していただきました。参加者からも、初々しくて楽しいと大好評でした。

競技種目は、陸上、卓球、水泳、アーチェリー、ボウリング、フライングディスクの個人競技に加え、団体競技では、ソフトボール、バレーボールが行われます。この大会に出場して、良好な成績を収めた方は、翌年度、全国の障害者スポーツ大会に参加することもできます。

- ・ 「青森県障害者スポーツ大会」は、障害者スポーツを支援してくれる団体の方々の協力を得て行っています。例えば、競技設備やライン引きなどの会場設営や競技審判などの協力をしてもらっています。また、全国の障害者スポーツ大会では、競技に対するアドバイスや選手の引率なども協力してもらっています。

【協力団体：①青森県陸上競技会、②青森県卓球連盟、③青森県水泳連盟、④青森県アーチェリー協会、⑤青森県ボウリング連盟、⑥青森県ソフトボール協会、⑦青森県バレーボール協会】

- ・ 車いすを対象としたバリアフリー設備が充実しているのは、マエダアリーナですが、障害者の方々が、日頃、仕事や学校が終わったあとや、土日に利用されている施設が、横内地区にある青森県身体障害者福祉センター「ねむのき会館」で、バスケットやバレーが行われています。

障害者スポーツを普及させていくため、関係機関と連携しながら整備も進めていきたいと思っています。

○ 発言者3（2年、女子）

私は陸上部の部長をしています。

青森県では、青森市で行われている青森マラソンや、弘前市で行われるアップルマラソンなどがありますが、もっと市内でスポーツ行事を催せば良いと思います。また、夏だけではなく、春や秋にも開催すると、それに向けてスポーツをする人が増えると思います。

そこで、2020年日本で開催されるオリンピックの前に、「あおもりんぴっく」と名付けた、全種目開催のミニオリンピックを開催し、県民にスポーツに親しむ機会をつくることを

提案します。

私が大学に合格した際には、そのようなスポーツイベントにボランティアスタッフとして関わり、運動前、運動後の血圧測定、運動中の脈拍測定、運動中の水分補給と食事指導などの健康指導を行います。

健康について一人で考え悩むのではなく、皆で助け合って健康な体を作り上げていくというイメージを持っています。



○ 知事

「あおもりんぴっく」は、すごくよいアイデアだと思います。

今、青森県では、誰もが、いつでも、どこでもスポーツに親しめる環境を作っていきたいと思っています。

県民スポーツレクリエーション祭、県民体育大会、県民駅伝競走大会などのスポーツイベントも次々に行っています。例えば、県民スポーツレクリエーション祭は、毎年7月に行っていますが、比較的誰でも参加できる大会です。サッカー、トランポリン、バドミントンの3種目が2020年のオリンピック種目です。

提案のあった「あおもりんぴっく」ですが、県民スポーツレクリエーション祭や県民体育大会に追加種目として加えた仕組みでやることは可能かとは思いますが。

しかし、運営団体が無いものや競技人口が極端に少ないものなど競技という形にならなかつたり、実施する場所がないものや審判の確保が難しいもの、経費の問題もあり、現実的にはなかなか厳しいと思います。少し種目を減らしてでも開催できたらおもしろいと思います。

○ 教育庁スポーツ健康課職員

ネーミングが非常に素晴らしいなと思いました。

2020年の東京オリンピック開催が決まった中で、先駆けて「あおもりんぴっく」を開催したら、他県ではこのようなネーミングで体育大会を開催しているところがないので、おもしろいと思いますし、今後、少し検討していきたいと考えています。

○ 発言者4（3年、男子）

私は今年の夏まで野球部に所属していました。今年の夏の甲子園大会には県立三沢商業高校が青森県の代表として出場しましたが、近年では野球だけではなく他の種目でも他県から来た選手が青森県の代表として全国大会に出場しているケースが増えています。それが悪いことだとは思いませんが、青森県の代表選手が他県民というのは少々寂しいような気がします。青森県から全国に、または世界に通用する人材を見つけるには、幼いときからスポーツに触れて



いくことが大切だと思います。また幼いときからスポーツにふれることは健康的な体作りにもつながると考えました。

ジュニア世代にどのようにスポーツに取り組ませるのか、また、人材発掘システムなどについてどのようにお考えですか。

○ 知事

先ほども少し話しましたが、青森県では、ジュニアアスリート発掘育成事業を行っています。野球に向いているかと思ったら水泳だったり、水泳かと思ったらバスケットだったりとか、本人が思っていることとプロが見立てるものの違いもありますし、ジュニアの発掘と育成は、本当に急務だと思っています。そのことで、国体に向けプラスになればと思っています。

ジュニアアスリート、トップアスリートという形での強化事業について、可能な限り応援していこうと進めています。そして、将来は、オリンピックや世界大会に出場してほしいと思っています。

○ 教育庁スポーツ健康課職員

もうひとつ、競技力緊急強化事業というものに取り組んでいます。

県内の選手が県外に流出したり、逆に県外のトップアスリートが本県に来るといったことがあります。指導者、その先生に憧れを持ち、その先生から指導を受けたいというような場合が多いです。

この事業は、指導者を育成していこうと、10年先の国体を見据えた取組の一つですが、ではれば県外への選手流出を防ぎたいということがあります。

県内で育った選手が、青森県代表として全国大会、世界大会で活躍し、故郷に戻って来て指導者となり、また次の世代を教えていくという、人材育成の好循環を目指しています。

○ 発言者5（3年、男子）

私は、今年の夏まで、ボート部の部長を務めていました。

今は、将来の夢である理科の高校教師になるために勉強中です。

夢はもう一つあります。高校でボート部の顧問をすることです。

2025年の第80回国民体育大会を青森県に招致することを表明されましたが、国民体育大会が青森県で開催されれば、青森県の観光資源がPRでき、地域活性化が見込めます。

また、子どもたちが大きなイベントを観戦でき、スポーツのすばらしさを知る機会にもなります。更に、スポーツへの関心が高まり、今問題となっている健康寿命の延びに貢献できるとも思っています。

しかし、施設や体制の面でたくさんの問題を青森県は抱えています。本校ボート部の顧問の吉田先生は、数年前から「青森国体が開催される時は天皇杯を取る」とおっしゃっていました。正直、私自身は、天皇杯というものをよく理解していませんし、県民は感心があるの



かなとも思います。また、勝てる選手を他県から集めたり、実業団チームを作ったり、指導者を育成したり、施設を整備したりする計画はありますか。

知事として青森国体をどのような大会にしたいか、お考えを教えてください。

○ 知事

国民体育大会は、国民の健康増進と体力向上、地方スポーツの振興と地方文化の発展ということで、都道府県持ち回り、都道府県対抗方式で毎年開催されています。

10年後に本県で開催できるとなると、48年ぶりです。

国民体育大会で優勝する一流選手達の活躍を見て、燃えるものがあって、またスポーツが振興されていく。青森県の場合、特に健康づくりに結びついていると思います。

メイン会場となる陸上競技場の整備も進めていくこととしています。また、国民体育大会のやり方ですが、岩手県と秋田県と連携して、3県でやろうという形になってきていました。

天皇杯と皇后杯は、いただけるとすれば名誉なことでありがたいことです。当然のことながら、優勝を目標として向かっていきますし、そのために選手の育成を今進めています。勝つことだけに力を注ぎ、昔でいうところの「ジプシー選手」のような人達を集めてまでやる必要があるのか考える時代になったと思っています。

陸上競技場の整備については、ようやくスタートできることになりましたが、次は、水泳のことについて、しっかりと対応していかなければならないと思っています。

もう40年近く前になりますが、国体が青森県で開催されたときは、私の住んでいた百石町はバレーボールの会場でした。その当時整備した体育館などを今でも持っています。既存の施設で使えるところはメンテナンスして使ってもらうことにしています。体育館などの施設を新たに作って、維持費が多額となり、職員の給料も払えなくなるようなことはやめようというのが、全国共通の認識です。

どうしても必要だと思われるもの以外は、既存のものを使う、あるいは他県を会場にしてもらう、そういう形で進めたいと思っています。

1千兆円を超える借金が国にあり、地方自治体もそれぞれ借金があり、青森県も1兆2千数百億円という借金を返せないでいるのが現状です。

そういった状況の中で、スポーツで元気を出そう、スポーツで健康を作ろう、スポーツのすばらしさを知ってもらって元気を出してもらおう、一流選手を見てもらおうと、そういう想いで国民体育大会を10年後に開催できればと思っています。

現在、ジュニアアスリート等の育成に入っていますので、その子たちが頑張ってくれて、天皇杯をしっかりと取っていきたいなということはしています。

